

「敵を愛しなさい」（ルカ六章二七〜三六節）

1 神の幸いの中で

今日も、ルカによる福音書を、引きつづいて取り上げます。先週から、いわゆる「平地の説教」に入っています。イエスは山から下りて、平らな所に立ち、そこで語りはじめます（六・一七）。そのためこの呼び名で知られていることは、先週、申し上げた通りです。

平地の説教の、いわば序文に当たるのが、「幸いと不幸」と見出しのついた最初の部分です。今日の箇所からが、本論です。

この平地の説教、全体としてこれを見れば、「倫理的」というと少し言葉が難しくなりますが、私どもの日々の生活の規範、私どもが何かを語ったり、何かを行ったりするさい、のっとるべき規範のようなものが、その内容になっているといつてよいと思います。

しかしそれは理由のないことではありませんでした。というのも、ここに来て状況が少し変化します。簡単にいえば、イエスは、一二人の弟子を選び、これを使徒と呼び、一つの集団として歩み始めたということです（六・一二〜一六）。弟子を選任したときのイエスの思いが、マルコによる福音書に書いてあります。

イエスが山に登って、これと思う人びとを呼び寄せられると、彼らはそばに集まって来た。そこで、十二人を任命し、使徒と名付けられた。彼らを自分のそばに置くため、また、派遣して宣教させ、悪霊を追い出す権能を持たせるためであった（三・一三〜一五。ルカ六・一二以下並行）。

これを読むと、一つは、「派遣して宣教させ、悪霊を追い出す権能を持たせるためであった」とあって、イエスのガリラヤでの伝道活動が大きくなり、一人ではない切れないぐらいになっていることが、うかがわれます。他方しかし、彼らを自分のそばに置くため、とあって、イエスの働きを担っていく使徒たちを特別に育てようとしていることも明らかです。

そうした集団、つまりそれはやがて、イエスが地上を去ったあと、教会として、教会共同体として歩んで行く、歩んで行かざるをえないのですが、それはどのようなものとして形成されるべきか、それがすでに、このガリラヤの活動の最初からイエスの心の中にあつたということです。彼らはどのような群れなのか、そしてどのような、いわば規律のもとに歩むべきなのか、イエスの思いが、平地の説教として、明らかにあります。

「どのような規律のもので」とか、「歩むべきか」とか、という言葉をいま使いましたが、もちろんイエスは何か新しい「律法」のようなものを授けようとしているということではありません。

律法のようなものではないということをはっきりさせておくため、今日の箇所を読むに当たり、すでに序文として見た、直前の「幸いと不幸」をもう一度取り上げてお

く必要があります。

とくに最初の祝福の言葉を振り返って見ます。

貧しい人々は、幸いである。神の国はあなたがたのものである（二〇節）。

この「貧しい人々」とはだれのことか、これは先週少し申し上げました。今日注意したいのは「幸いである」という言葉、または、少し言葉をおぎなつて、「神の国はすでにいまあなたがたのものである」という言葉です。イエスは「幸いである」といつているのであつて、「幸いになるであらう」、「なるかも知れない、それを保証します」といつているのではありません。いま幸いである。イエスは権威をもつて、あなたがたは幸いである、と言い切っているのです。そうです。私どもは、すでに幸いです。私どもの状況のいかにかわらず、神の国、神の支配のもとにすでに置かれ、生きていくからです。

今日の箇所、平地の説教の本論、敵を愛しなさいからはじまる、イエスの一連の戒め、これらはすべて、そのような神の支配のもとに現にある私どもに対して語られているものです。

イエスの戒めを守れば幸いになるというわけではありません。すでに幸いです。それゆえその幸いの中で、私どもはイエスに従う者としてどのようなか、それが語られます。

2 愛し、善を行い、与えること

そのようなイエスを信じ従い、イエスと共に宣教の働きを許されている群れ、いまやはつきり教会といつてよいと思えますし、いうべきだと思えますけれども、この群れを支配する、そこに生きる者たちが服すべき規範、あるいは在り様、それは一言でいえば「敵を愛しなさい」です。今日の箇所、いろいろのことが書いてあつて、複雑に見えますが、結局、この一句、敵を愛しない、に尽きるように思います（二七、三二、三五節）。

敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にしないで。悪口を言う者に祝福を祈り、あなたがたを侮辱する者のために祈りなさい。あなたの頬を打つ者には、もう一方の頬をも向けなさい。上着を奪い取る者には、下着をも拒んではならない。求める者には、だれにでも与えなさい。あなたの持ち物を奪う者から取り返そうとすることはならない。人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい（二七、三一節）。

敵を愛する、その意味するところはともかく、それは、イエスに端を発する、聖書の、キリスト教の根本思想であることは間違ありません。

敵を愛せよという教えは旧約聖書にはありません。あるのは隣人はこれを愛し、敵はこれを憎めということです。

サムエル記に、こんな話があります。ダビデが息子アブサロムを亡くしたとき、司

令官ヨアブは、ダビデのあまりの憔悴ぶりに、むしろ腹を立てて、ダビデにこうい
のです。王よ、あなたは、あなたを憎む者を愛し、あなたを愛する者を憎まれるので
すかと。たとえ息子でも、あなたが、あなたを憎む者をそれほど愛するなら、あなた
を愛して命を賭けてきたわれわれを、それは侮辱することだ(下一九・七)。敵を愛
するということは、つまり旧約にはないのです。

こうした旧約の世界全体を向こうに回してイエスは、全く新しい世界を切り開き明
らかにしました。愛敵です。そしてそれを語り、教え、それを生き抜いた。こうした
人は、世界の歴史を見渡しても、だれもいません。

よく「敵を愛する」というのはおかしい、形容矛盾だという人がいます。愛せない
から敵、愛するなら敵ではないと。言葉の上ではそうかも知れませんが。問題は現実
のことです。こういう意見もあります。敵をつくらなければいいと。これも、その通
りかも知れませんが、果たして敵のいない人は、どこかにいるのでしょうか。私ども
が敵対心をもっていないとしても、相手にそのように映ることもあります。私どもは
まさに罪人です。自分の力では何ともならないような人間関係の中に、その軋轢の中
に生きています。

いまお読みした箇所では「敵」は、次のように描かれています。彼は私どもを「憎
む」「英訳はヘイト」者として現れます。「悪口を言う者」として「侮辱する者」と
して現れます。彼は「あなたの頬を打つ者」として現れます。あるいは「上着を奪い
取る者」として現れます。単純に「求める者」としても現れます。そして「持ち物を
奪う者」として現れるのです。それに対して、ここに、いろいろの対応の仕方が書い
てありますが、整理していえば〈愛しなさい〉、〈善いことをしなさい〉(二七節「親
切にしなさい」の直訳)、そして〈与えなさい〉、この三つが、イエスのいう敵を愛
することです。

3 父が憐れみ深いように

ここまではしかし、私の感覚では、イエスの愛敵の教えは、他と際立って違ったも
のではないように思います。それぞれの状況の中で〈利他的に〉振る舞うといったら
いいでしょうか、それと同じように見えるからです。そうした中で、今日の箇所の後
半のところは、イエスの教えをはっきりさせているところのように思われます。

自分を愛してくれる人を愛したところであなたがたにどんな恵みがあるうか。罪
人でも、愛してくれる人を愛している。また、自分によくしてくれる人に善いこ
とをしたところで、どんな恵みがあるうか。罪人でも同じことをしている。返し
てもらったことを当てにして貸したところで、どんな恵みがあるうか。罪人さえ同
じものを返してもらおうとして、罪人に貸すのである。しかし、あなたがたは敵
を愛しなさい。人に善いことをし、何も当てにしないで貸しなさい。そうすれば
たくさんの報いがあり、いと高き方の子となる(三二〜三五節)。

先ほど〈愛しなさい〉、〈善いことをしなさい〉、そして〈与えなさい〉、この三
つが、私どもが、どのような状況にあっても取るべき態度だ、それが敵を愛すること

だと申しました。

しかしこの三つのこと、とても立派なことに見えて、じつはここでイエスが鋭く観察しているように、私どもでなくても、キリスト者でなくても、真逆な「罪人」でもしていることなのです。

そうすると、そうした罪人のすることと、キリスト者のすることとは、どこで違うことになるのでしょうか。

簡単にいえば、敵を愛するという行為が、もし対等な立場でのやりとり（ギブ・アンド・テイク）、互恵、ないし互譲、つまりお互い様の精神だけなら、愛したところで、善いことをやったところで、与えたり貸したりしたところで、それは何も特別なことではない、勝（まさ）ったことではない。恵みにはならない、というのです。

もう少し突っ込んだ言い方をすれば、閉じられた、いわば同質の集団（グループ）の中で、そうしたことが、どんなに美しくなされても、あまり意味がないというのです。とても厳しい言葉だと思います。

逆に言えば、罪人たちとキリスト者との違いは、内輪のこととしてではなく、人と人とを隔てている境界を越えて、愛し、親切にし、与え、貸すというようなことが出来るかどうかということです。

コロナ禍の中でソーシャル・ディスタンス（社会的距離、隔たり）という言葉がすっかり定着してしまいましたが、悪い意味のディスタンス（距離）、差別、白人と黒人、アジア人と欧米人、日本人と韓国人、男性と女性、そして教会とその他、こうした隔たりを前提として、その内側ですべてが完結しているとすれば、その愛の、善行の、与えることの意味は何なのかと、イエスは問うているのです。

難しいことは分かっています。でも、それでも、私ども、イエスを信じ、従い、神の栄光をあらわすことを人生の目標としている者たちは、そこを乗り越えていかなければならない。なぜなら、とイエスは言います。

いと高き方は、恩を知らない者にも悪人にも、情け深いからである（三・五節）。

それゆえに、イエスはこう勧めます。

あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい（三・六節）。

父なる神は憐れみ深い。この「憐れみ深い」、これは旧約聖書のもっとも重要な言葉の一つです。それは新約では一般に、愛（アガペー）という言葉に置き換えられます。しかしこの憐れみも旧約では、イエスラエルという契約の民への憐れみに限って語られることが多かった。しかしイエスはこの神を、イスラエルにも異邦人にも、善人にも悪人にも憐れみ深い神として示してくださいました。いな、イエスこそ、この神の憐れみをご自分の言葉と生き方をもって体現した方です。ですからこのイエスに倣うこと（ローマ一五・五）、つまりイエスを信じ、そして従うこと、これが、私どもも憐れみ深い者となる道にほかなりません。